

世界遺産登録された 棚田景観の価値と保護

—フィリピンとインドネシアの比較—

はじめに 景観研究室では、平成23年度より「文化的景観およびその保存・活用に関する調査・研究」の一環として、諸外国との比較研究を実施している。平成26年度は、アジアの文化的景観、とくに世界遺産登録された農業に関連する文化的景観について調査を実施した。アジアにおいて農業に関する文化的景観として世界遺産登録されている地域は、「フィリピン・コルディエーラの棚田群」(1995年)、「バリ州の文化的景観：トリ・ヒタ・カラナ哲学にもとづくスバック灌漑システム」(2012年、インドネシア)、「紅河ハニ棚田群の文化的景観」(2013年、中国)の3地域であり、いずれも稲作によるもので棚田を資産に含んでいる。本稿では、そのうちフィリピンとインドネシアを取り上げ、世界遺産としての価値と保護という観点から比較検討をおこなう。

フィリピンの棚田景観 同サイトはルソン島北部のイフガオ州に位置し、少数民族のイフガオ族により、およそ2,000年間にわたって耕作が継続されてきたことで形成されたものである(図52)。現在では、「天国への階段」とも称される壮大な景観として世界的に知られている。世界遺産への文化的景観の導入と前後して開催された国際会議ではアジアの棚田の象徴的な事例として扱われ、1995年にはアジアのコメ文化に関する国際会議がマニラおよびイフガオ州バナウエにて開催された。

こうしたなかで、イフガオの棚田景観は1995年に農業に関する文化的景観として初めて世界遺産に登録された。しかし、耕作放棄の進行、マネジメント体制の脆弱

さなどから、2001年には「危機に瀕した世界遺産(危機遺産)一覧表」に記載され、さまざまな国際的な支援もおこなわれた。一連のプロセスを通じて、地元NGO等を中心とした地域レベルでの取り組みが成果を上げ、持続可能な保護への道筋が見えてきたことから、2012年に危機遺産から解除された。こうした過程は、農業に関する文化的景観の脆弱さと農家を中心とした住民参加の重要性を端的に示している¹⁾。

世界遺産としての顕著な普遍的価値は、1) コメ生産に関する持続可能なコミュニティの共有システムとその2,000年間にわたる継続、2) 持続可能な資源利用にもとづく生業・耕作システムおよび景観の継続、3) ひとと自然の調和した関係による土地利用とそれが形成した偉大な芸術的価値をもつ棚田景観に対して認められている(登録基準iii、iv、v)。つまり、世界遺産として守る対象は棚田景観そのものであり、それを形成してきた地域社会のシステム、水田および共有林等の管理形態となる。

インドネシアのスバック景観 バリの信仰は地域の土着的信仰とヒンドゥー教が習合したバリ・ヒンドゥーが中心を占めている。各家が敷地内にヒンドゥー寺院をもち、独特の集落景観を形成している。そして、こうした信仰が農耕や水利に対しても大きな影響を与えている。伝統的な水利システム「スバック」の存在である。

「バリ州の文化的景観」は、2007年に世界遺産へ推薦されたが、資産構成・関係性が不明瞭であることを主な理由として「登録延期」となった。その後、資産構成等が見直され、2011年の再推薦によって登録された。世界遺産としての顕著な普遍的価値は、1) 12世紀に始まるトリ・ヒタ・カラナという古代の哲学的概念による文化

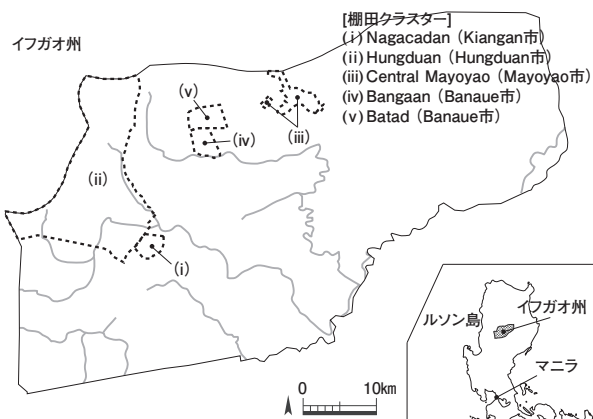


図52 世界遺産構成資産の分布(フィリピン・コルディエーラの棚田群)

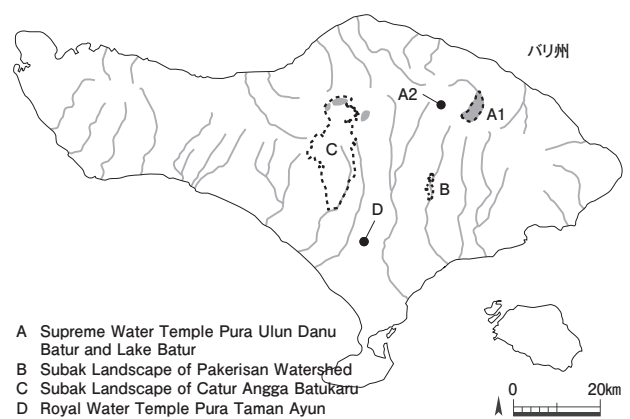


図53 世界遺産構成資産の分布(バリ州の文化的景観)

的伝統とそれが形成したスバック景観の水利マネジメント、2) スバックシステムの傑出した証明、3) バリ水寺の独特な組織形態に対して認められている(登録基準 iii、v、vi)。登録にあたっては、スバックにもとづく水利システムが顕著な普遍的価値の中心となり、資産には棚田に限らず、寺院や平地の水田も含まれている(図53)。

世界遺産としての価値に関する比較 イフガオの棚田群の世界遺産としての価値は、棚田景観そのものとそこに内在する社会や耕作のシステムにある。この点で価値は視覚的にも明瞭でわかりやすいが、その一方で、棚田を形成してきた社会や耕作等の無形の行為を通じて、芸術性を含む棚田の形態的な価値も維持することが求められる。

他方、バリ州の文化的景観における棚田は、棚田の芸術性や営農が直接的な価値とはなっていない。バリ・ヒンドゥーという信仰の基盤のなかに成り立つ世界観の一部としてスバックシステムがバリ島全土で存在し、そのネットワークのなかに各資産が位置づいていることが価値の中軸である。推薦書における比較研究でも、両地域の宗教観の差異とその影響について言及されている。

このように棚田という保護対象は同じであれ、両者の世界遺産としての価値の観点の違いは、遺産としての保護について異なる方向性を与えることから、その後の地域社会の将来像を考える上でも極めて重要な点である。

マネジメントに関する比較 登録における価値は保護の対象と密接に関わる。イフガオの棚田では灌漑用水路の修理にコンクリート材を用いることに対して世界遺産委員会(2007年、2011年)で懸念が示された。他方、バリの棚田では、灌漑用の用水路壁はすでにコンクリート材に置き換わっている部分も多い。登録に際しての価値が異なる以上、守るべき対象も変わってくる。したがって、スバックというシステムに重きをおいたバリの棚田では許容されるが、棚田景観そのものに価値の重点を置いたイフガオでは許容されない修理もありうる。社会的環境を踏まえ、地域の生活や持続可能な開発と遺産として可能な保護のバランスのなかで考えていくべき課題である。

また、いずれのサイトも世界遺産委員会でマネジメント体制の課題が懸念され、イフガオでは危機遺産一覧表記載の理由ともなった。イフガオの場合、危機遺産一覧表記載後、地方分権の流れも相まって、国から州・市レ

ベルに権限が委譲され、保護を担当する組織・体制が次第に確立されてきた。また、地元NGO・大学等の積極的な貢献のなかで、遺産を取りまく体制は大きく改善されてきた。他方、バリの場合、推薦書及びマネジメントプランで設置が示されたステークホルダーの連携会議が登録後一度も開催されていないことへの懸念が世界遺産委員会(2014年)で示されている。こうしたなかで、イフガオの棚田では、世界遺産に登録されていることが学校教育の現場を通じて多くの地域住民に浸透していることを、筆者らの調査で確認できた²⁾。他方、バリの場合、例えば県立の博物館のスタッフでさえスバックシステムについての知識は豊富であるものの、世界遺産登録に関する情報はあまりもっていないようであった³⁾。時間をかけた取り組みを通じた、ステークホルダーの意識と参加を醸成することの必要性を示している。

おわりに 地域社会が社会的、経済的に持続することなくして農業に関する文化的景観の継承は難しい。そのためには、地域を取り巻く状況の中で現実的に受け継ぐことが可能な価値や対象、また、保護やマネジメントの在り方、より大きな部分では地域社会が目指す将来像を連動させて、俯瞰的に検討していくことが不可欠であろう。

本稿で取り上げたアジアにおける2つのサイトは社会経済的な状況に違いはあるものの、いずれも、農業に関する公的補助等を用いた景観保護が積極的に図られてきたヨーロッパ等とは保護を取り巻く環境がまったく異なる。公的施策等が限られている状況下で保護を効果的に展開するためには、持続可能な保護が可能である文化的景観の価値(内在するシステム)を明確にし、地域の体制に則した持続可能な保護を見出だしていくことが求められる。そして、こうした点は、世界遺産に限らず、日本の文化的景観にも通ずることである。(菊地淑人)

註

- 1) 菊地淑人「『世界遺産』の棚田をめぐる国際的・国内的保護の変遷：フィリピン・イフガオの棚田と伝統的文化空間の保護に関する研究(その1)」『日本建築学会計画系論文集』77-679、2012。
- 2) Y. Kikuchi et. al., *What is heritage for the Hungduan people?: Significance of a World Heritage landscape for local lives: Hungduan, Ifugao Province, Philippines*, University of Tsukuba, 2012.
- 3) 現地における筆者の聞き取りによる。